

城東じ・ば・子の「茶の間」における学生による地域福祉実践研究

～コロナ禍における認知症支援のカフェの現状と課題～

堀川涼子*1 ・ 鈴木ありさ*2

1. 研究背景

2020 年に出現した新型コロナウイルス感染症の拡大で、地域活動に大きな影響が出ている。

第一生命経済研究所が 2021 年 9 月 17-19 日にインターネット調査により行った「第 4 回新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」によると、過去 1 年間の地域活動の中止または延期について、「お祭り、体育祭、文化祭などのイベント」(57.1%)、「地域住民と一緒に体を動かしたり、スポーツをする講習会」(47.4%)、「地域住民と交流できる場所(サロン等)」(43.9%)といった、地域住民が交流、体験等を通じて親睦を深めあえる「集合型」の活動に関して、その割合が高いことが分かった。(図1)

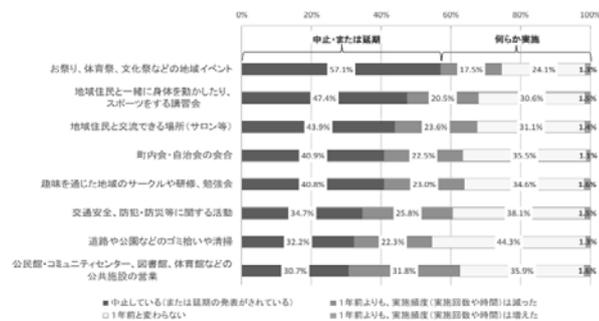
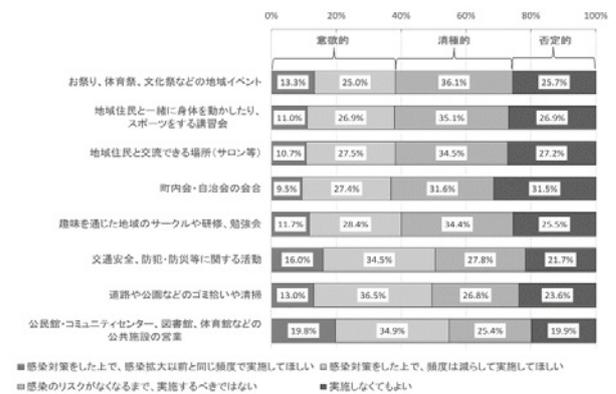


図1 過去 1 年間の地域活動の実施状況
出典:第一生命経済研究所

さらに、地域活動に対する「今後の意向」においては、「町内会・自治会の会合」、「お祭り、体育祭、文化祭などの地域イベント」、「地域住民と一緒に身体を動かしたり、スポーツをする講習会」、「地域住民と交流できる場所(サロン等)」、「趣味を通じた地域のサークルや研修・勉強会」等の活動では、「感染のリスクがなくなるまで、実施するべきではない」、「実施しなくてもよい」という消極的あるいは否定的な回答が 5 割を超えた。(図 2)

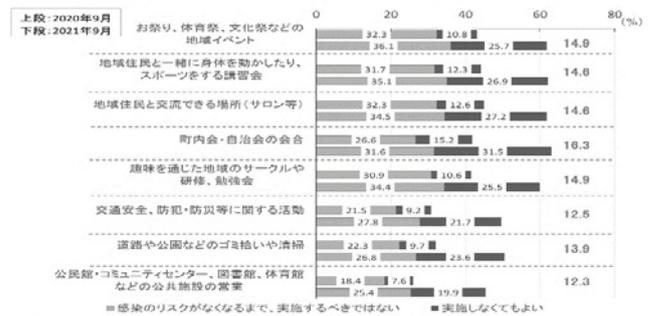
*1 美作大学生生活科学部社会福祉学科 教授・修士(学術)



資料:図表 1 と同様。

図2 地域活動の今後の意向
出典:第一生命経済研究所

再開に消極的、否定的な回答割合を 2020 年 9 月と 2021 年 9 月で比較すると、すべての項目において 2020 年よりも 2021 年の調査の方が消極的・否定的な回答割合が高くなっており、否定的な割合はその差が 10 ポイント以上ある。(図3) このことは、この 1 年で各種の地域活動について今後は「実施しなくてもよい」(活動をする必要はないのではないかと考える人が増加していることを示唆している。1)



注:赤字は、2020年9月と2021年9月における、否定的(「実施しなくてもよい」)回答の差を示している。資料:図表 2 と同様。

図3 消極的・否定的な回答割合の比較(2020-21年)
出典:第一生命経済研究所

*2 社会福祉法人 白寿会(2021 年度卒業生)

以上のことから、新型コロナウイルス感染の拡大により、地域活動が現在縮小しているだけではなく、将来にも影響を及ぼしていることが分かった。

血縁・地縁が希薄となり、社会的孤立の状態が生まれ、そこから、虐待や介護殺人、自死や心中など問題の重度化、複雑化、深刻化が引き起こされている。このような現代社会の福祉課題はコロナ禍で増大している可能性が高い。

2. 研究目的

津山市内、特に少子高齢化が進む城東地区において、そのまちづくりや多世代交流に大学生が関わることは大きな意味があると考え。さらに、学生にとっても、学内で机上の勉強をするだけではなく、実際の地域に出向いていき、地域住民と協働して地域の生活課題に触れ、その解決のための活動を行うこと、実際に認知症当事者やその家族と直接かかわることは、これからの「地域を基盤としたソーシャルワーク」実践の体験的な学びとなる。これらのことから「城東じ・ば・子の茶の間」における活動の意義やソーシャルワーカーをめざす学生の成長を迫っていくことを継続した研究の目的としている。

特に今回は、新型コロナウイルス感染症拡大により、2019年までは毎月行っていた認知症支援のカフェ「おあしすカフェ」が中止や変更を余儀なくされたことを踏まえ、「おあしすカフェ」に関わる学生が、岡山県内の「認知症支援のカフェ」の現状を把握し、コロナ禍でも地域のつながりを切らないための活動について研究した実践を報告する。

3. 認知症支援のカフェとは

一般に「認知症カフェ」と呼ばれる「認知症の人やその家族・知人、医療やケアの専門職、認知症について気になる人などが気軽に集まり、なごやかな雰囲気のもと交流を楽しむ場所」は、オランダで「アルツハイマーカフェ」として始まった。日本でも2012年、厚生労働省の文書に記載され、各地で開催されるようになってきている。²⁾ 認知症支援のシンボル色がオレンジ色であることから「オレンジカフェ」と呼ばれることもある。本報告では、以下「カフェ」とする。岡山県内では2016年には44ヶ所だったカフェが、2021年7月には133ヶ所に増加している。³⁾

厚生労働省が2020年に行った調査では、全国におよそ7,000か所ある、「認知症(オレンジ)カフェ」のうち、回答があ

っただけでも80%を超えるカフェが、新型コロナウイルス感染症拡大により、2020年8月時点で再開に踏み切れず、利用者に影響が出ていることがわかっている。⁴⁾

4. 調査の概要

このような状況を踏まえ、岡山県内のコロナ禍における認知症支援のカフェ運営状況に関するアンケートを行った。その概要は以下のとおりである。

- 1) 調査目的 コロナ禍による認知症カフェの現状、課題を明らかにし、カフェが果たす役割に立ち返り、コロナ禍で途切れかかっている地域との繋がり意義を示し、コロナ禍でのカフェの在り方を考察していく
- 2) 調査対象 岡山県内認知症カフェの運営者
- 3) 調査方法 自記式郵送調査
- 4) 調査期間 2021年8月30日(月)～9月17日(金)
- 5) 回答率 73.7%(98/133ヶ所)

5. 調査結果

2020年度のカフェの運営状況については、コロナ感染の影響を受け、途中休止したと回答したカフェが49%と最も多かった。続いて、2020年からずっと中止にして開催できていないカフェが38%あった。開催できていないカフェ33ヶ所の本来の開催場所は、高齢者施設や介護事業所が17ヶ所、公民館・公会堂が13ヶ所、空き施設が1ヶ所、店舗が2ヶ所という結果になった。一方で、コロナ感染の影響はなく、継続して開催したというカフェも9%あった。(図4)

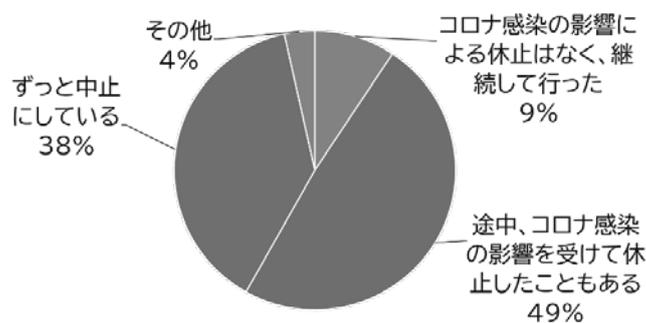


図4 2020年度のカフェの運営状況について

出典 アンケートをもとに鈴木作成

カフェを「休止」や「中止」した理由として「国の緊急事態宣言」が一番多く、次に、「現場運営者やスタッフ等の意見」が多かった。(図5)

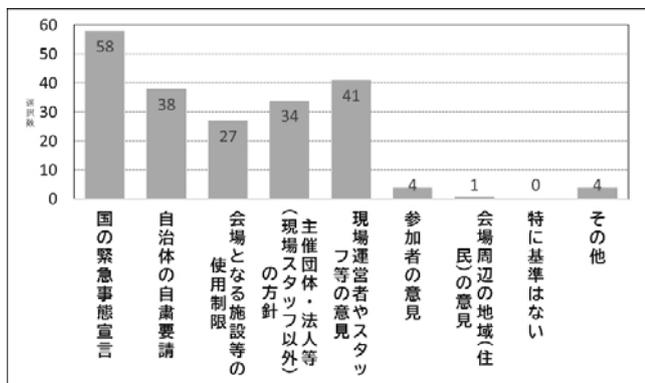


図5 カフェを休止や中止にした理由

出典 アンケートをもとに鈴木作成

コロナ禍での開催時に、これまでと形を変えたこととしては、検温や手指消毒以外に、飲食等を制限しているところが一番多かった。時間の短縮、三密を避けて広い場所への会場変更や参加者の人数制限が続いた。その他では、机にパーテーション設置したり常時喚起を行ったりと感染対策を行いながら開催していた。コロナ禍で活用が進んだとはいえ、オンラインを取り入れたカフェは1か所もなかった(図6)

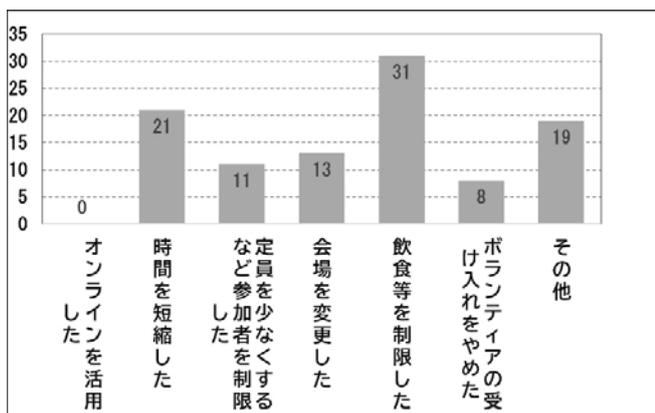


図6 コロナ禍におけるカフェの開催方法の変更内容

出典 アンケートをもとに鈴木作成

カフェが休止・中止の期間、カフェの運営者と参加者とのつながりについては、「あった」と回答したカフェが67%、「なかった」と回答したカフェが33%であり、カフェが休止・中止していても参加者とのつながりをつくっていたことがわかる。つながりの具体的な工夫としては、

- ・運営側から電話等で参加者の様子を伺った
 - ・広報誌を発送した
 - ・チラシの配布時(ポスティングの時)に話をした
 - ・ハガキを参加者へ出すときに、メッセージを添えた
 - ・お便り配布時、自宅のできる認知症予防の書かれたプリントを同封した、お菓子を手作りして配った
- 等の回答があった。また、多くはないが、参加者同士が連絡を取り合っていたという回答もあった。

6. 考察まとめ

新型コロナウイルス感染症の拡大により、2020年4月～2021年3月の1年間、87%のカフェが休止・中止のうち38%のカフェは「ずっと中止にしている」状況であった。緊急事態宣言や蔓延等防止期間以外にも「自粛」しているところは多くあり、その理由として、国や自治体の自粛要請のみならず、現場のスタッフの意見や主催団体の方針で中止したことが分かった。特に高齢者福祉施設や介護事業所が開催している場合、利用者や職員への感染を恐れて、不特定多数の人を受け入れない方針を取っていることが大きな要因であった。

また開催しているカフェにおいても、飲食の制限や開催時間の短縮により、「カフェ」という空間で、飲食をともにしながらゆっくり、ゆったり話をし、本音を語り合うという「認知症支援のカフェ」の本来の機能が制限されている。三密回避のために人数の制限や、新規の利用者やボランティアの受け入れ中止により、不特定多数の人が気軽に参加できるというカフェの良さが活かしていない現状がある。

会場(公民館等)のWi-Fi環境の未整備や、参加者に高齢者が多くICTへの抵抗があること等から、オンラインを活用した交流はほとんど見られなかった

つまり新型コロナウイルス感染症により、①認知症の人と介護者を第一に、地域住民、専門職も、住みやすい地域社会づくりに貢献できる場所であること、②多様な人々の対話と会話を基盤としており、地域そして地域住民との緩やかな調和と協働により成立するものであること、③多様な人との交流があり、カフェという空間で気軽に集える場であること、という本来の「認知症支援のカフェ」の意義⁵⁾が果たしにくい状況になっていることが明らかになった。

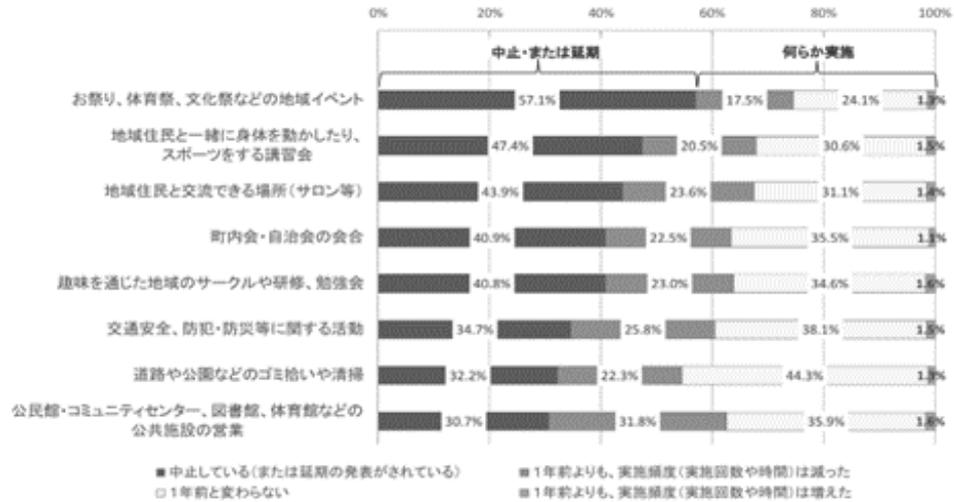
一方で、コロナ禍でカフェ活動がままならない中、アンケートの回答率は約74%とかなり高かった。カフェ運営者の「コロ

ナ禍での現状」に対して何とかしたいという思いの強さを感じた。それぞれが工夫しながらカフェの継続や再開を模索し、カフェが開催できなくてもつながりを絶やさない工夫をしていることが分かった。新型コロナウイルス感染症については、ワクチン接種が進む一方で、新たな変異株の出現など、いまだ収束の見込みが立っていない。「活動をしない」のではなく、安心してできる形や、活動しなくてもつながりを保つ工夫を、今後も考えていくことが求められる。いまこそ、「地域福祉」が問われているだから。

《引用参考文献》

- 1) 榎第一生命経済研究所「2年の自粛が地域にもたらしたもの～感染拡大の長期化は、生活者意識にどのような影響を与えたのか～」
<https://www.dlri.co.jp/report/ld/174649.html>
- 2) 武地一(2015)『認知症カフェハンドブック』クリエイツかもがわ,
- 3) 岡山県長寿社会課「岡山県内の認知症カフェ一覧」
- 4) 2020.11.01NHK ニュースサイトより
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20201101/k10012691311000.html>
- 5) 社会福祉法人東北福祉会 認知症介護研究・研修仙台センター
(2017)「認知症カフェの実態に関する調査報告書」より

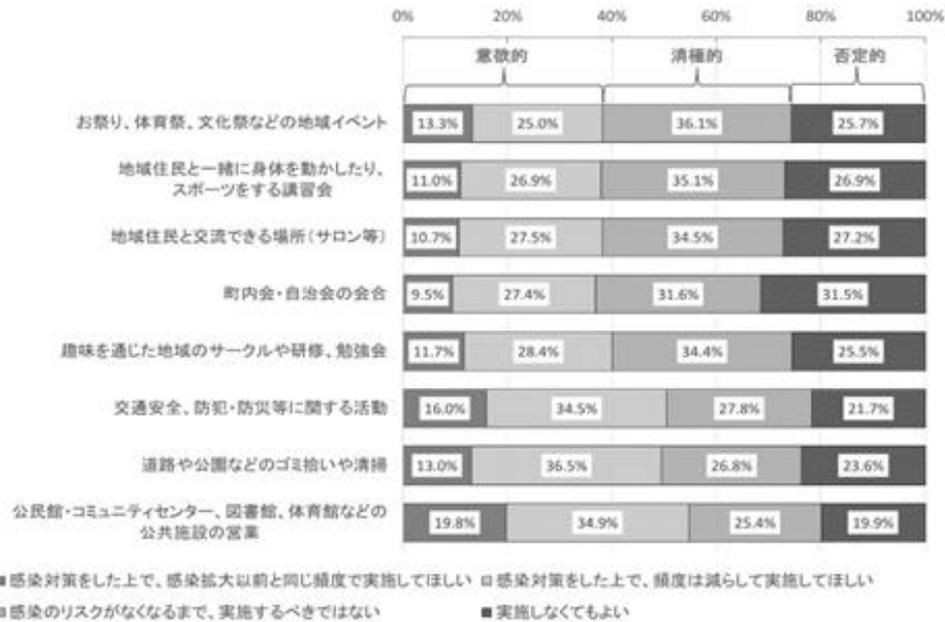
図表



注1:設問は活動への参加の有無は問わず、居住する地域の実態についてたずねた。
 注2:全回答者の内、「地域にそのような活動や事業はない」「その他」と回答した人を除く。
 資料:第一生命経済研究所「第4回新型コロナウイルスによる生活と意識の変化に関する調査」

図1 過去1年間の地域活動の実施状況

出典:第一生命経済研究所



資料:図表1と同様。

図2 地域活動の今後の意向

出典:第一生命経済研究所

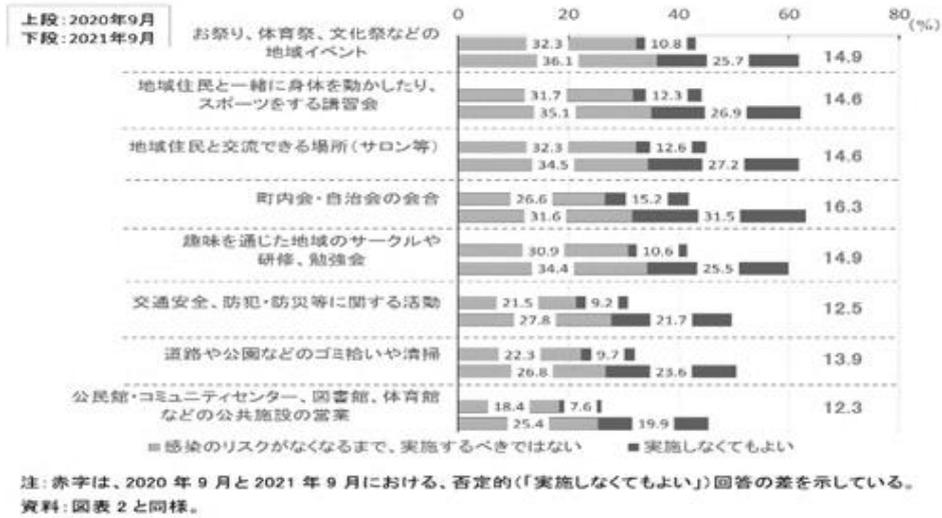


図3 消極的・否定的な回答割合の比較(2020-21年)

出典:第一生命経済研究所

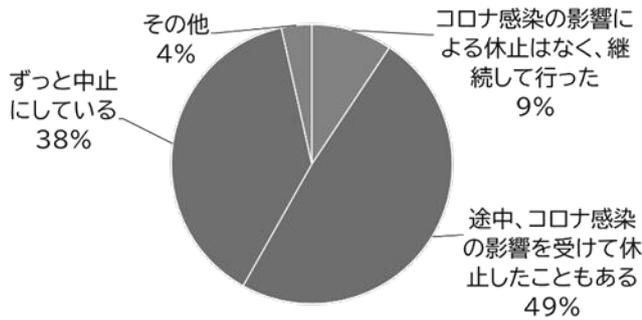


図4 2020年度のカフェの運営状況について

出典 アンケートをもとに鈴木作成

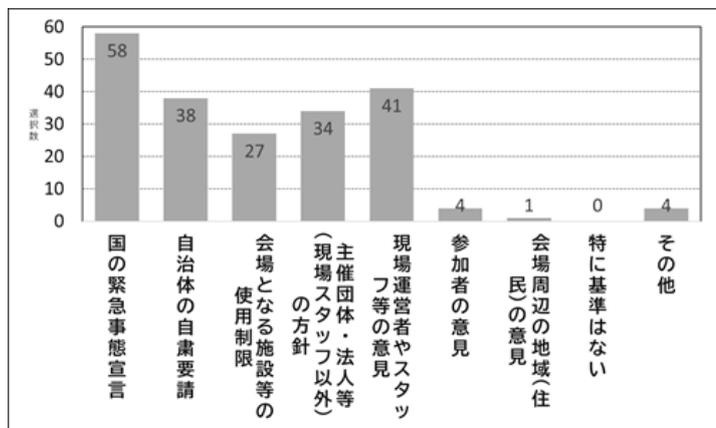


図5 カフェを休止や中止にした理由

出典 アンケートをもとに鈴木作成

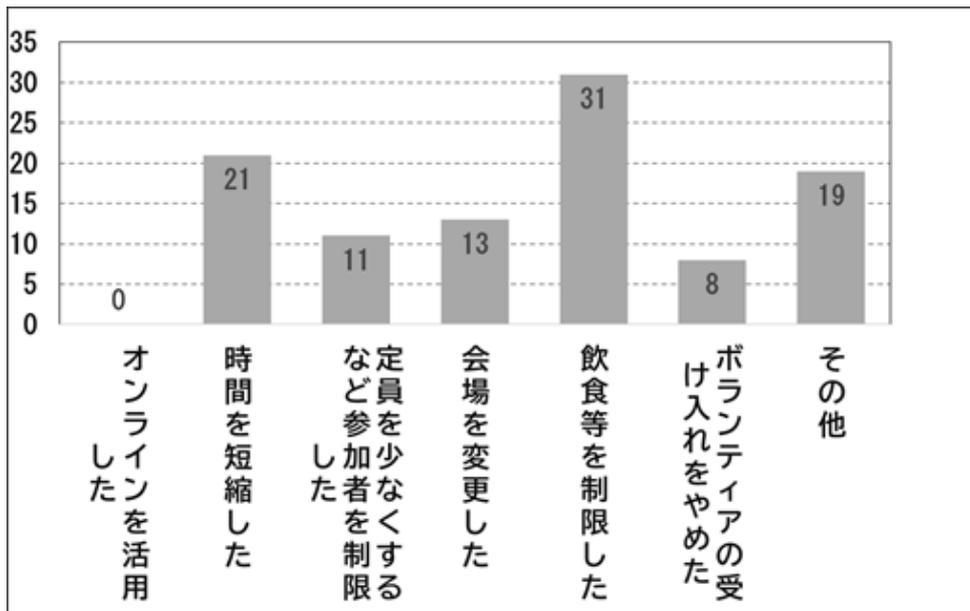


図 6 コロナ禍におけるカフェの開催方法の変更内容

出典 アンケートをもとに鈴木作成